

国語 第3学年こそあど言葉 授業の設計図

元にした物：小学校学習指導要領（平成29年告示）の原文と、国立教育政策研究所の学習評価の参考資料。教科書の本文・問題・挿絵は入れていません（先生が入れる欄）。東京書籍「新編 新しい国語（令和6年度版）」の単元一覧にある11月の学習。教材名と配当は公式資料を基にした。教科書の本文・台詞・挿絵・固有の問題は転載していない。

この単元で子どもが最後にできるようになること

指示語が指す内容を前後の文から特定する方法を、用語の暗記だけで終えず、自分が言葉を使う場面へ移す。授業の中心は「この「それ」を元の言葉に戻すと、何になりますか」である。児童の結論だけを集めると、元から知っていたのか、授業で検討して考え直したのかが見えない。初めの答えと指示語と指す内容を矢印で結んだ文を照らし、判断の根拠がどう変わったかを確認する。

学習指導要領のどこに書いてあるか（原文）

学習指導要領の項目	原文
〔第3学年及び第4学年〕〔知識及び技能〕(1)カ	カ 主語と述語との関係，修飾と被修飾との関係，指示する語句と接続する語句の役割，段落の役割について理解すること。
〔第3学年及び第4学年〕B 書くこと(1)エ	エ 間違いを正したり，相手や目的を意識した表現になっているかを確認めたりして，文や文章を整えること。

単元の目標

指示語が指す内容を前後の文から特定する方法を捉え、言葉を使う場面で役立てる。指示語と指す内容を矢印で結んだ文に自分の判断と理由を表す。友達の応答や自分の記録を基に、言葉の捉え方や表し方を見直そうとする。

評価規準（3観点）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①指示語が指す内容を前後の文から特定する方法を理解し、学習で扱った語句や例を示して説明している。 （〔知識及び技能〕(1)カ）	①「書くこと」において、教師作成の短い説明文で指示語を見つけ、指す語句を戻して読み、意味が通るか確かめている。（B(1)エ）	①見通しをもって言葉や表現を検討し、交流で気付いた点を基に、自分の読み方や表し方を見直そうとしている。

単元の流れ

総時数は東京書籍の公式単元一覧による。以下の活動の配分と本時の位置は、本案で提案する授業計画である。

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1 （本時）	○教師作成の短い説明文で指示語を見つけ、指す語句を戻して読み、意味が通るか確かめる。 ○この「それ」を元の言葉に戻すと、何になりますかを考え、最初の答えとその理由を残す。	知①・思①（発言・学習記録）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第2次	2	○友達の説明と比べ、指示語と指す内容を矢印で結んだ文を見直す。 ○別の語句や場面でも今回の考え方を使い、直した理由を伝える。	思①・態①（見直しの記録）



本時の案

本時の目標：指示語が指す内容を前後の文から特定する方法について、例や資料を根拠にした自分の考えを指示語と指す内容を矢印で結んだ文へ表すことができる。

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 (分)	1 身近な経験と既習の言葉を確認、今日使う教材や資料を準備する。 ○「この「それ」を元の言葉に戻すと、何になりますか」 【めあて】指示語が指す内容を前後の文から特定する方法について、自分の考えと理由を表そう。 〈予想される児童の反応〉 ・近くの物の名前より、前に説明した出来事全体を表している。 ・初めの見方では決められない箇所もあり、例を比べてみたい。	本時に使う具体例が見える所へ置く。一番近い名詞が必ず指すものと考えている姿が見られても、すぐに訂正せず、どの言葉や経験からそう判断したかを聞き取る。
展開 (分)	2 教師作成の短い説明文で指示語を見つけ、指す語句を戻して読み、意味が通るか確かめる。 3 指示語と指す内容を矢印で結んだ文の下書きや途中の記録を示し、考えた理由を説明する。 ○「この「それ」を元の言葉に戻すと、何になりますか」 4 聞き手は、説明に使われた語句や資料を示して質問する。答えが異なる所は、意味や条件を調べてもう一度表す。 〈予想される児童の反応〉 ・近くの物の名前より、前に説明した出来事全体を表している。 ・最初はそう考えたが、別の例と比べると直したいところが見つかった。	前の文へ戻り、候補の語句を入れて文全体の意味を読み比べさせる。説明が難しい児童には、対象の語句を選ぶ、線や矢印で関係を示す、口で説明するという方法も用意する。書く量を減らす場合も、本時に考える言葉の関係は残す。早くできた児童には、同じ説明が通らない場合や、他の言い方の可能性を考えさせる。 ◎思① 教師作成の短い説明文で指示語を見つけ、指す語句を戻して読み、意味が通るか確かめている。（途中の記録・説明）
まとめ (分)	5 指示語と指す内容を矢印で結んだ文へ、本時の判断と理由、見直した箇所を記す。 【まとめ】近くの物の名前より、前に説明した出来事全体を表している。 6 初めの答えとの違い、または理由を確認して残した点を振り返る。 〈予想される児童の反応〉 ・指示語が指す内容を前後の文から特定する方法を、別の場面でも意識して使いたい。	結論が教師の例と同じかだけで判定しない。この「それ」を元の言葉に戻すと、何になりますかへの答えに、語句や事実を示した説明があるかを見る。課題が残る場合は、次の関連学習でも同じ観点で記録を集める。 ◎知①（語句や関係の説明）・態①（見直しの理由。単元を通した記録と合わせる）

板書の構造（縦書き・右から左へ）

縦書きで右から左へ構成する。右端に単元名と本時の問い。その左に、児童が最初に出した考えと比較する例を置く。中央には指示語が指す内容を前後の文から特定する方法を確かめる語句や関係を並べ、線や矢印で根拠と判断を結ぶ。左側に指示語と指す内容を矢印で結んだ文で残す項目と見直しの理由を置く。左端は本時に確かめたこととその後を使う場面の記録にする。教科書の台詞や文章はこの配布物へ複製しない。

つまづきやすい所と手当て

一番近い名詞が必ず指すものと考える姿には、前の文へ戻り、候補の語句を入れて文全体の意味を読み比べさせる。本人に読ませることと、考えを表すことを分け、読字に負担がある場合は教師の読み上げや拡大提示を使う。筆記に負担がある場合は口頭説明を教師が記録する。同じ目標のために表出の方法を選ぶようにし、支援を受けたことを評価を下げる理由にしない。

プリントの案

考えと理由を残す学習カード

指示語と指す内容を矢印で結んだ文のために、対象の語句や資料・初めの判断・理由・交流後の修正を記す欄を置く。今回の中心の問い「この「それ」を元の言葉に戻すと、何になりますか」を欄の上に書く。教科書の文章や挿絵を複製しない。

見直しの理由を記すカード

最初の記録と見直した記録を並べる。「近くのもの名前より、前に説明した出来事全体を表している」のように何を根拠に考えたかを、自分の言葉で書く。教師の見本の写しではなく、自分で検討した語句や理由を残す。

出典：教材名・月・配当時数：東京書籍 令和6年度版 国語 単元一覧（https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/kokugo/data/kokugo_tangen_3_202503.docx）／東京書籍 国語 年間指導計画の公式入口（<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/kokugo/keikaku/>）／文部科学省 小学校学習指導要領解説 国語編（https://www.mext.go.jp/content/20220606-mxt_kyoiku02-100002607_002.pdf）／国立教育政策研究所 指導と評価の一体化 小学校国語（評価規準の形式）（https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_kokugo.pdf）
AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

